

## 歴史像を伝える 岩波新書

「歴史総合」の授業では、教室での「私たち」が、教科書をはじめとする、「私たち」を主語にした「歴史叙述」を解釈し、歴史の知識と歴史的思考力をむすびつけ、〈いま〉と過去とを往還する「歴史実践」の対話を行うことが求められる。

本巻は、シリーズ第1巻の総論的な『世界史の考え方』に続き、歴史を学ぶ営みに迫る。

はじめに——三つの「手」

「歴史像」の伝達／「私たち」と「私」

### ■ I 「歴史叙述」と「歴史実践」

序章 歴史像を伝える

- 1 歴史の学び方
- 2 ジェンダー史から／で学ぶ
- 3 ジェンダー史の「歴史実践」

第一章 明治維新の「歴史像」

- 1 明治維新の「歴史叙述」
- 2 明治維新の「歴史実践」

### ■ II 「歴史総合」の歴史像を伝える

第二章 「近代化」の歴史像

福沢諭吉の三つの顔／男性啓蒙家たちの女性論／「女工たち」への視線／国民国家と帝国主義／森鷗外の戦争経験

第三章 「大衆化」の歴史像

新しい青年と、「民衆」＝「大衆」の登場／イブセン『人形の家』をめぐって／「身の上相談」のジェンダー／「大衆社会」とメディア／『キング』とラジオ／小津安二郎とハリウッド／男性普選の実現と婦選の主張／市川房枝の「デモクラシー」と「総力戦」

第四章 「グローバル化」の歴史像

R「グローバル化」とは／「高度経済成長」のなかの女性／マクドナルド化する社会／村上春樹、および『ねじまき鳥クロニクル』

むすびにかえて——「戦後歴史教育」の軌跡のなかで

あとがき

「歴史総合」に役立つブックリスト

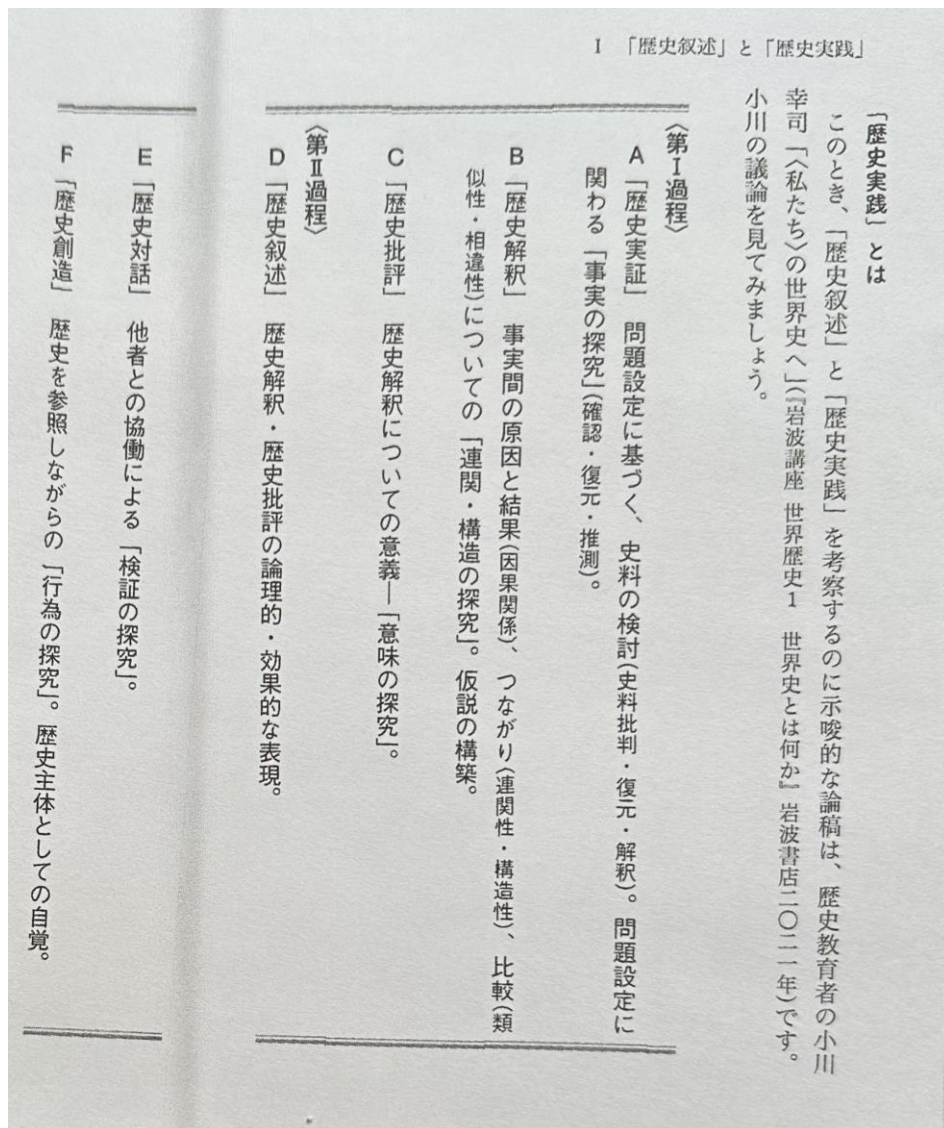
成田龍一（なりた りゅういち）

1951年生まれ、日本女子大学名誉教授。

専攻—近現代日本史。

著書—『近現代日本史との対話』全2巻（集英社新書）、『近現代日本史と歴史学』（中公新書）、『シリーズ日本近現代史④ 大正デモクラシー』（岩波新書）、『歴史論集』全3巻（岩波現代文庫）ほか。

編著—『シリーズ歴史総合を学ぶ① 世界史の考え方』（岩波新書）、『〈世界史〉をいかに語るか——グローバル時代の歴史像』（岩波書店）ほか。



岩波新書「シリーズ 歴史総合を学ぶ」の第2弾。日本近代史の研究者・成田龍一氏によ

る単著である。

本書、特に「I「歴史叙述」と「歴史実践」は用語や文章の言い回しが抽象的過ぎて難解だった。

巻末のブックリストに掲げられた文献のいくつかはあらかじめ読んでおかなければならなかったようだ。

①小川幸司氏の所説からインスピレーションを得た、歴史学習が教材の提示に始まる「歴史叙述」の段階から、さらにそれを相互に検証し、自らの糧としていく「歴史的实践」につなげなければならない「歴史総合」の枠組み、認識自体に異論はない。

しかし歴史総合での「主体的で対話的な深い学び」（いわゆるアクティブ・ラーニング）で難しいのは、教材を提示し「歴史叙述」につなげる過程が、教師の恣意に任せやすく、結果的に生徒を型にはめてしまいがちになるという点である。

本書の第1章でいえば、明治維新の歴史像を知るのに遠山茂樹や井上清から始めなければならぬのか？、

明治維新の「歴史実践」の例として挙げられているのも、1970～90年代の『歴史地理教育』の記事とはどういうことか？、

教師が古典的書籍や古い実践例から学ぶことについては否定しない。

特に歴史学の場合はそれが必要な時さえある。

しかし、教育現場で生徒に提示し「叙述」させるべきは、「現代的な諸課題」（新学習指導要領）に対応するものでなければならない。

②後半部分にあたる「II「歴史総合」の歴史像を伝える」は具体的な史料が検討対象になっているおかげでまだ読みやすかった。新学習指導要領にのっとり、近代史の各段階で近代化・大衆化・グローバル化という要素が相互に関連性を持っているという枠組みは明快である。

計3章にわたって数多く挙げられている「歴史叙述」の例は、残念ながらどれも高校生にはあまりに難しすぎる。

これらを理解し自分のものとするには少なくとも大学教養レベルの素養がないと無理であろう。

また、この部分においてもやはり「古さ」が目につく。

著者は本書の随所でジェンダー観点の重要性を説くが、著者の解釈そのものは現代の「ジェンダー史」というよりその前段階である「女性史」・「女性解放史」のレベルにとどまっているように感じられる。

また、村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』は「グローバル化」の題材として取り上げられているはずなのに、いつの間にか「間宮中尉」の語るノモンハン事件の叙述にページ数が持

っていかれてしまっている。

結局のところ、本書は本来「歴史総合」について語る書物でありながら、著者の研究者としての関心対象である「戦後歴史学」に引きずられ過ぎている。

「戦後歴史学」について知りたいのならば、それこそ成田氏自身の岩波現代文庫三部作を読めばいいのである。

本書は一般の読者からは歴史学の書籍として好評を博することはあるにしても、レビュータイトルに書いた通り、新学習指導要領に対応しなければならない教育現場の切迫した問題意識に応えたものとは言い難い。

「叙述」「実践」の主体である生徒はおろか、高校教員のファシリテーターとしての姿勢らほとんど見えてこないのは残念である。

歴史総合というのは世界システム論が定説化されて、高校でも近現代史はナショナルヒストリーではなく「世界システム」として学ばせようとなってきたのだろう。

それと同時に、歴史研究者は専門とする時代や地域の歴史像を提供していればよかったが、現況は、「問いと対話」が求められるようになった。

学ばせ方も変えようという二つの試みが同時に企図されている

「歴史実践」について箇条書き。

・維新期の民衆は「客分」であったために征韓論などにも与しなかったが、民衆が自らも文明国日本の一員としての意識を持つようになると、朝鮮・中国への優越意識を持つようになる(p.77)

・これまでの日本史研究では、自由民権運動を明治政府への反対運動と見る点に軸足を置くあまり、下からの国家形成という問題意識がなかった(p.147)

・クラウゼヴィッツの『戦争論』を翻訳していた森鷗外の日露戦争従軍詩歌集『うた日記』では、戦闘のあり方の変化にも着目している(p.175)

・近代化の過程で啓蒙された人々は 20 世紀に入ると民衆→大衆→群衆として行動するようになる。今村仁司は彼らが「ひとつの決定的な社会勢力」「社会と歴史の原動力」として登場したことが近代社会の特徴としている(p.191-)

・吉野作造や社会主義者のなかでも柔軟な思考をみせていた堺利彦の死は《リベラール自由主義の屋台骨、そしてそれを社会主義へと媒介する存在がなくなり》、世相は不安定さを増し、三原山での心中の流行や東京音頭のときならぬ乱舞などがおこると、すると、小津の作風も反モダニズム・ナショナリズムの勃興の影響を受けて変化する。(p.238-)

・サザエさんの長谷川町子は自身だけでなく母も矢内原忠雄に傾倒し、宗教性を除いたプロテスタンティズム的生活倫理がみられ、それが朝日新聞に長らく掲載されたことは、高度成長にすんなり順応できない大衆の心性を表す。マスオさんの同居は嫁姑問題を抜きに家族

を描く工夫(p.270-)

・リッツアの「マクドナルド化」=マクドナルドの作法に従う購買-飲食は学校、病院などの社会領域に及び、公共空間を支配している。これは政治性を排除して合理化を進められるヴェーバーの「鉄の檻」と似ており、日本においても画一的で没個性的な社会が形成されていく(p.287)

- ① 「歴史総合」を教える教員と世界史・日本史を学び直す社会人を対象とする。  
特に教員にとって有益な歴史像を考察する授業実践事例が豊富に紹介されているのは本書の利点である。
- ② 歴史学習の基盤を「歴史叙述」に求め、歴史書を資料=史料を読解しながら「歴史実践」=「歴史像」の形成へと、歴史的思考力を培う内容になっている。  
平塚らいてうの男女平等論が何を根拠に主張されたのか、今日のSDGsのジェンダー平等論の思想的根拠と比較しながらジェンダーの歴史像を議論すればよいのではないか？
- ③ 福沢諭吉の三つの顔を紹介し、顔の変化を読み解く試みは注目される。  
三つの顔は変化したというよりは結実したと読み解く方が良いのではないか？  
『学問のすすめ』により個人が学問(実学)に励み、《独立自尊》の精神が育成される。  
国民が《独立自尊》の精神を身に付けた日本国は、近代国家としても《独立自尊》の国家として成長し、欧米人から「半未開」(半文明)国としてのイメージを脱却し、「文明国」の仲間入りをする。これが福沢の言う《脱亜》である。
- ④ このような福沢の顔の変化は変化ではなく、「結実」なのである。『学問のすすめ』→『文明論之概略』→『西洋事情』へと福沢の思想は個人から国家へと結実したのである
- ⑤ 福沢のナショナリズムが問題提起され、『脱亜論』が根拠としてあげられる。  
《脱亜論》が、日本が半未開のアジア諸国を脱し、欧米列強の仲間入りをするにより征韓論を正当化する主張が問題視される。  
しかし、福沢は日本が「脱亜」することにより、アジアの覇者となり、後進国アジアを文明に導くというナショナリズムを提起したのではなく、あくまで半未開状態(半文明)を脱して植民地化を免れ、欧米と並び立つ近代国家へ成長するという目的を主張したのである。  
そのためには個人が実学(経済学や近代科学)を身につけることが出発点となる。
- ⑥ 歴史の捉え方や見方そのものは研究の進展により変貌する。  
これが歴史の進歩であり、歴史像の形成も変化し、成長する。  
これを教えてくれるのが本書である。

|        |        | 歴史学                              |        |                      | 歴史教育   |   |
|--------|--------|----------------------------------|--------|----------------------|--------|---|
| 1950年代 | 戦後歴史学Ⅰ | A (1951)<br>B (1954)             |        |                      |        |   |
| 60年代   | 戦後歴史学Ⅰ | C (1961)<br>D (1966)<br>E (1968) | 民衆史研究Ⅰ | I (1964)<br>J (1968) |        | U (1960)  |
|        |        |                                  | 民衆史研究Ⅱ | K (1970)<br>L (1976) |        |   |
| 70年代   |        |                                  |        |                      |        |   |
| 80年代   | 戦後歴史学Ⅱ | F (1976)                         |        | M (1982)             | 社会史研究Ⅰ | O (1978)<br>P, Q (1986)<br>R (1990)                         |
|        |        |                                  |        |                      |        |   |
| 90年代   |        |                                  |        |                      |        |   |
| 2000年代 | 戦後歴史学Ⅱ |                                  | 民衆史研究Ⅲ | N (1998)             | 社会史研究Ⅱ | S (1999)  |
|        |        | G (2008)                         |        |                      |        |   |
| 10年代   |        |                                  |        |                      |        |   |
| 20年代   | 戦後歴史学Ⅱ | H (2017)                         |        |                      |        | T (2019)  |
|        |        |                                  |        |                      |        |   |
|        |        |                                  |        |                      |        | 戦後歴史教育Ⅲ   |
|        |        |                                  |        |                      |        | V (1975)<br>W (1986)<br>X (1990)<br>Y (2000)<br>Z (2011~12) |

#### 戦後歴史学

A 遠山茂樹『明治維新』 B 江口朴郎『帝国主義と民族』 C 丸山真男『日本の思想』 D 大塚久雄『社会科学の方法』 E 橋川文三『ナショナリズム』 F 中村政則『労働者と農民』 G 荒井信一『空爆の歴史』 H 吉田裕『日本軍兵士』

#### 民衆史研究

I 色川大吉『明治精神史』 J 田中彰『未完の明治維新』 K 高木俊輔『維新史の再発掘』 L ひろたまさき『福沢諭吉』 M 内海愛子『朝鮮人BC級戦犯の記録』 N 牧原憲夫『客分と国民のあいだ』

#### 社会史研究

O 良知力『向う岸からの世界史』 P 二宮宏之『全体を見る眼と歴史家たち』 Q 遅塚忠躬『ロベスピエールとドリヴィエ』 R 川北稔『民衆の大英帝国』 S 谷川稔『国民国家とナショナリズム』 T 峯陽一『2100年の世界地図』

#### 戦後歴史教育

U 上原専祿編『日本国民の世界史』 V 加藤文三ほか『増補版 歴史教育の資料と扱い方』 W 加藤文三・本多公栄・吉村徳蔵『100時間の日本史』 X 吉田悟郎『自立と共生の世界史学』 Y 加藤公明『日本史討論授業のすすめ方』 Z 小川幸司『世界史との対話』